

令和2年度 第7回 SDGsに関する万国津梁会議
議事概要

日時：2020年12月11日(金) 13:00～15:00

場所：NIAC 大会議室 ほか（オンライン会議）

出席者：島袋 純委員長、蟹江 憲史副委員長、佐野 景子委員、玉城 直美委員、平本 督太郎委員、佐喜真 裕委員

（島袋委員長）

本日の会議が最後だが、来年早々には知事に意見書と最終報告を手交できればいいと思っている。本日も活発な議論をお願いしたい。

（事務局）

本日の審議事項は二つ。まず、意見書とそれから最終報告（案）についてである。島袋委員長に議会の進行をお願いしたい。

（島袋委員長）

11月30日に予定されていた意見書の手交式が知事のご病気で実施できなかったのも、今後の対応について、事務局から説明をお願いしたい。

（事務局）

年明け1月8日に最終報告の手交式の際に意見書もまとめて手交したいと考えているが、検討願いたい。

（佐野委員）

まとめるというのはよいアイデアだと思う。手交式は行われなかったものの、意見書自体は11月に県に渡っており、それから約1か月が経つ。手交という儀式的なことよりも、意見書に基づいて何らかのアクションがとられたかどうか、知事から話を聞く方が、あの時期に提出した意味があると思う。また、最終報告の冒頭でも意見書の提出について触れておけば、手交の際にこちら側からも言及でき、意見書に関する動きについて知事から話を聞くことができるのではないかと。提出後が大事ということである。

（島袋委員長）

つまり、最終報告の「最終報告にあたって」という部分に加えるという理解でいいか。

（佐野委員）

そこに書かずとも、手交の際に委員長から言及するだけでも十分だとは思いますが、本会議の活動実績の1つとして書いておくことは一案だと思う。

（島袋委員長）

最終報告にて意見書について言及するのであれば、中間報告その1及び中間報告その2を以前に提出していることも述べたほうがよいのかもしれない。

（佐野委員）

中間報告1と2についても書くようにしたい。

(島袋委員長)

では、「最終報告にあたって」において意見書について言及しておき、私が最終報告を手交する際に、意見書提出後の対応について伺うということによろしいか。

(委員賛成)

(平本委員)

1点ある。以前お伝えしたかと思うが、最終報告書提出にあたり、メディアに正しく伝えてもらうためにも、我々からメディアに向けてきちんと説明をしたほうがいいと考えている。最後の機会でもあるため、念入りにメディアの方と相談のうえで、きちんとした説明の場を設定したほうがいいと思う。

(島袋委員長)

メディアに説明したり質問に答えたりする機会を設けたほうがいいのではという平本委員のご意見だが、これを臨時の審議事項とする。このような機会を設けるべきだろうか。

(玉城委員)

SDGsの広がりの中で広報の弱さが沖縄SDGsパートナーからも指摘されており、最終報告書についての意見交換と同時に、地元メディアの皆様とSDGsの普及・広報にかかる意見交換ができれば望ましい。地元のメディアが年明けにでもSDGs宣言を行われるという話も聞いており、意見交換の場をメディアの皆様の宣言に活用していただきたいとも思っている。

(島袋委員長)

手交式後のメディアとの意見交換に追加して別の意見交換の場を設けたいということか。

(玉城委員)

メディアが年明けに自社のSDGs宣言を考えていくにあたり、また、SDGsを広げていく側として、我々の情報が非常に役立つこともあると思っている。SDGsに関する万国津梁会議が解散になる前にそのような場があればいいと思ったのだが、あくまで一案であって、みなの意見を聞いてみたい。

(島袋委員長)

つまり、最終報告の中身に関する意見交換や質疑応答のみではなく、今後SDGsを進めていくパートナーとしてどう進めていくべきか意見交換をしたいということと理解した。

(佐野委員)

オンライン開催ということもあり、これまで万国津梁会議がメディアへ直接説明する機会がなかったので、手交式後に万国津梁会議としての考えを説明したり、メディアからの質問に回答することは必ず行うべきだ。また、メディアと委員の意見交換の場を設けるかについては、手交式後にメディアからの要望を確認し、是非やりたいということであれば別の機会を設ければいいのではないか。

この1年弱の間に思ったのは、委員として、メディアと協働したいという思いはあるが、メディアはメディアの立場があるとも感じており、いい距離感を持って付き合っていきたい。メディアに対し「ステークホルダー会議をやりましょう」と働きかけるタイミングではもはやないだろう。実施指針案の最後にあるように、今後、本会議の手を離れて広報や普及について考えていく際に、メディア側の自主的な動きの中で万国津梁会議の委員を入れて話をしようという動きが出てくれば、そこに呼応していくことは重要だが、こちらか

ら集まりを持つべく働きかける関係ではないように思う。

(島袋委員長)

手交式後に質疑応答をし、その際にメディアから意見交換する場を別途設けられないか提案があれば、我々も場を設けることでいいか。

(玉城委員)

相違ない。

(島袋委員長)

事務局はどうか。

(事務局)

我々としては委員の皆様と沖縄県のお考えに合わせて動いていきたい。沖縄県としての意見も少しお伺いしたいのだが、いかがだろうか。

(沖縄県企画調整課)

手交式後、委員から記者に説明（ブリーフィング）いただき、かつ、質疑応答に対応いただけるならば、正確な報道に繋がるかと思うので、ありがたい。基本的には県庁の記者クラブにお声掛けして、委員からご説明をいただいたうえで質疑応答になるかと思う。ブリーフィング参加への呼びかけと、意見交換への呼びかけでは目的が異なっており、また、マスコミで対応いただく方のレベルも異なるため、ブリーフィングと質疑応答に特化したほうが、マスコミも対応しやすいだろう。意見交換は、どういう形式で進めるのかなどの検討が必要である。

(島袋委員長)

手交式後はブリーフィングと質疑応答を行い、もしメディアからも意見交換を行いたいという要望があり、合意形成ができれば、別の機会に意見交換の場を設けたいと伝えるということによろしいか。

(佐喜真委員)

賛成である。マスコミでは取材する記者と SDGs 担当者は別なので、ブリーフィングに的を絞ったほうがより正確に伝わると思う。

(島袋委員長)

では、手交式後はブリーフィングのみを行うこととする。次に、最終報告について議論をしたい。前回の第 6 回会議の際に様々な意見があったが、「7. 今後の推進体制」内の「SDGs 推進のためのプラットフォーム」についてはほぼ全部追記することになったので、そこを中心に議論する。文言修正は会議後に Chatwork で可能なため、重要な修正部分あるいは新規に書き足した部分に議論を絞りたい。実際に執筆に携わっている佐野委員から特に議論すべき部分について報告いただきたい。

(佐野委員)

「7.」に絞った議論をする前に、これが最後の会議になると思うので、前回の会議で出た意見の反映状況を確認しておきたい。冒頭の「最終報告にあたって」を付けたが、先ほど意見のあった中間報告と意見書の提出について追記する。

資料の 8 ページ冒頭の「4. 沖縄における SDGs 推進のフレームワーク」は、日本政府の A

アクションプランとモニタリング指標に関し、蟹江副委員長からの情報提供を踏まえ、沖縄県が作るアクションプランではしっかりと具体的な目標と達成度を測るモニタリング指標を設定することを追記している。ここは、沖縄らしくやっていくということである。次に、9 ページの「5. 基本理念、優先課題と SDGs ゴール・ターゲット」は、県外委員から改めて指摘もあったので、「しまくとぅば」によって大切に継承されてきた「沖縄のこころ」が沖縄らしいSDGsにつながる、ということがわかるような書き方に変更した。11 ページの優先課題については、①に性の多様性・LGBT 等、障害の有無、国籍を入れている。③に、「しまくとぅば」の普及推進を追加した。

29 ページの「文化・芸術、スポーツ」では、「しまくとぅば」について書き足している。芸能・芸術と別に、沖縄はスポーツも振興しているということで、両者を書き分けた。30 ページには新たな項目として、⑫に世界のウチナーンチュ、ウチナーネットワークについて書き足した。

そして、本日議論する、31 ページからの「SDGs 推進のためのプラットフォームの設置」は、前回会議の意見を踏まえて文章を書き起こし、平本委員からインプットを得て、図表に整理されたものを入れた。基本的には、県のSDGs 推進本部が司令塔となり、そこと連携・協働しつつ、ゆくゆくは民間・市民団体主導の沖縄SDGs ステークホルダープラットフォーム事務局が支援して、様々な取り組みをその傘下にもって、活動が進んでいくという体制を提案している。

特に県のSDGs 推進本部については、実際にアクションプランを作成したり、モニタリングを行うために様々な分析等も必要となるため、作業部会が必要である。また、ゴールや優先課題ごとに専門部会を設置して幅広いステークホルダーから情報を得ながらアクションプランを作り、モニタリングを行う体制を考えている。SDGs について有識者に助言を得ることも必要であるため、アドバイザリーボードを設けている。これらはあくまでも一案として提示しており、何をやっていかねばならないのかという役割に注目して、今後十分な議論を経て体制を考えていくべきだと付記している。平本委員からも補足説明をお願いする。

(平本委員)

沖縄県SDGs 推進本部はSDGs 推進の方向づけとそのチェックを行う。まさにリーダーシップをとるという大きな役割がある。一方で、その方向性が合っているのか否かを専門的な観点から客観的に確認をすることが当然必要となるため、アドバイザリーボードがグローバル及びローカルの視点からその確認作業を行う。また、当然SDGs はみんなで作って進んでいくものであり、だれ一人取り残さない体制が必要なので、大きな受け皿や自立を促す仕組みが欠かせず、沖縄県SDGs ステークホルダープラットフォーム事務局がそれらを担う。同事務局は沖縄SDGs パートナーやアワードに関する事務局を兼ねる。推進本部の下には作業部会があり、体系的に取りまとめを行ったり、案を作ったりする。その下に、各専門部会があり、各優先課題や目標毎に、様々な意見を受け入れて実態を把握したりする。一番のポイントは、あくまでも役割が重要だということだ。この組織図のままですつくる必要はなく、そこは今後実施を担う方々が決めていく部分である。最後に、あくまでも一案であるということをお伝えしておきたい。

(島袋委員長)

「一案である」と佐野委員も強調されていたが、本文中でもそれが明記されているのか。

(佐野委員)

そのとおり。この実施指針案の主語は沖縄県 SDGs 推進本部だが、ここに書かれている体制はあくまでも一案であり、十分に議論して体制を作っていこう、という述語になるのは問題ないと思うので、このように書いた。

(島袋委員長)

了解した。では今から「7. 今後の推進体制」について議論を行いたい。特にプラットフォームの話に議論を集中したい。意見はないか。

(蟹江副委員長)

企業関係者から「SDGs を利用してよかった」という話を聞くことがあるが、彼らは「SDGs をきっかけとしてコミュニティが広がった」と述べている。つまり、買い手や取引先が多くなったということだ。彼らが、ビジネスを超えたプラットフォームとして利用することによって従来の取引先を超えた広がりが出てくる、ということもプラットフォームの 1 つの意義と活用方法であると書き込んでもいいのではないだろうか。

(佐野委員)

特に企業にとっては、自らのコミュニティを超えてビジネスチャンスが広がるし、ひいては経済の活性化にも繋がるという意義を伝えるための文言を加筆したい。

(平本委員)

蟹江副委員長の意見に私も賛同する。私が確認する限り、企業活動の活性化に加えて、企業以外の団体でも SDGs のコミュニティに参加したことで、コロナ禍を乗り越えるための新しい選択肢を得ることができたという団体が増えている。よって、今の苦しい状況だからこそプラットフォームを立ち上げ、みんなで乗り越えていくということをつけ加えていただけないか。

(島袋委員長)

我々もステークホルダー会議の場が様々な組織同士が直接つながる場となったことを驚きをもって実感しており、新たに加筆するということがよろしいか。ビジネスについて、佐喜真委員の意見を伺いたい。

(佐喜真委員)

賛成である。企業としても、ビジネスとの結びつきについて記載するということは非常に大切であると感じている。

(玉城委員)

教育業界内でのパートナーシップについても書き込めないか。子どもの貧困対策や質の高い教育などを進めるには、教育業界にある縦割り行政を乗り越えていかねばならない。SDGs のいうパートナーシップは、既存の形を見直したり、再構築したり、新しい連携を作ったりすることであり、それを加えることができないだろうか。

(佐野委員)

玉城委員の意見は、担当部署が決まっているとその担当部署でタコつぼになるということと捉えた。作業部会や作業部会内の専門部会で、その中だけでタコつぼにならないように横断的に意見が出され、お互いの仕事を横目で見ながら、相乗効果が出るように連携して取り組むことを担保すべきである、ということか。

(玉城委員)

そうだ。コロナ禍の中で食糧にも困窮する人々があり、学校を通じて彼らに対して食料を提供したいという組織があった。しかし、貧困対策は担当部署が違っており、うまく連携できないこともあった。コロナ禍のような緊急時には、SDGs によってそれを乗り越える連携が生まれてほしいと思っている。

(佐野委員)

考えながらの発言になるのだが、「沖縄 SDGs ステークホルダープラットフォーム」などの民間主導の部分では、その形を多様で緩やかなものとするのが可能だと思っている。SDGs 推進本部などのアクションプラン策定やモニタリングを行う部分では、個別の課題に捉われて縦割りにならないように、多角的な視野で協議できるように、専門部会の作り方も気を付けなければならない。SDGs のゴールよりは優先課題に沿って対応する方が、複数部署が関わることが可能だと思う。ただ、実際に施策として具体的な行動にしていくには、県の担当部、主管部が定まらないと進まないとも思う。よって、部署が明確に決まっていることも重要であるが、複数部署が関わってくることなのだ、ということが理解できるようにメンバー構成を工夫するなど、その仕立て方において工夫や注意が必要ということかもしれない。

(島袋委員長)

具体的な作業部会とか専門部会の作り方をどこまで報告書に書き込むかという問題もある。沖縄県が今後体制をつくっていく中で、議論して詳細を決めていくべきだろうとの考え方もできることから、恐らく、意図して詳細に記述しなかったのかとも思っている。

(平本委員)

詳細な記述をすることはこの会議の役割ではないと思う。今のような議論は、県が次年度、アドバイザーボードを先に組成し、そこで組織の枠組みについて議論していけばいいのかもしれない。例えば、アドバイザーボードの役割に、「具体的なプラットフォームの実現案を検討する」ということを加えればいいのかと思う。

(島袋委員長)

なるほど。アドバイザーボードに役割を追記すればいいということか。

(佐野委員)

この実施指針案の作成主体は沖縄県 SDGs 推進本部と想定されており、自らが「縦割りにならないように」という戒めの言葉を加えるかどうか。言葉は適切かわからないが、「縦割りにならず」といった一言を入れることでくさびが残ると思う。

(島袋委員長)

縦割りにならないようにと文言を加えるのは非常にいいアイデアである。玉城委員、このような考え方でいいか。

(玉城委員)

問題ない。

(島袋委員長)

私が事前に伝えていた修正意見について伺いたい。SDGs アワードや基金に関する文章はステークホルダーの役割の活性化に関連すると思っており、31 ページの「パートナーグループを形成し発展させられることも考えられる」という文言に続けて書いてはどうかという

意見を伝えたが、私の修正意見は採用されていない。何か意図があって、アワードや基金については別のパラグラフに載せているのか。

(佐野委員)

ステークホルダー会議やセミナーなどについては本会議の議論においていろいろな意見が出てきており、実際にステークホルダー会議は試行したので、具体的なイメージがある。しかし、SDGs アワードや SDGs 基金については、中間報告その 1 や今回の資料の 26 ページのインセンティブの設計にも項目としては挙がっているが、会議の中で具体的なイメージが共有される程度まで議論していない。これらに実際に取り組むとなると、しっかりした体制が必要になると思う。よって、上のパラグラフに書き込むよりはその他として、委員長の追記のとおり、「パートナーシップの推進とステークホルダーの取組の活性化」のためにはアワードや SDGs 基金というものもある、という整理にした。

(島袋委員長)

了解した。確かに様々な場で意見としてはあったが、我々もそれらを取り上げて議論したわけではない。よって、これらについては今後議論が必要な部分として独立させた段落を設けたということと理解した。ただし、記載すべき項目であるという理解は委員間で共有されていると思うのでこのまま記載することとしたいが、よいか。

(異論無し)

(島袋委員長)

再度私が修正意見を伝えた部分であるが、31 ページの下から 10 行目あたりに、貧困対策の一例として記載されている「関西 SDGs プラットフォーム」についてである。沖縄県では「こども未来会議」と「こども未来基金」というステークホルダー中心の会議体があるため、報告書内で扱う事例としてこれらがわかりやすいのではないかと思っていたが、これらの具体例を入れる必要性はないだろうか。

(佐野委員)

ご発言のとおり、それらは課題としての「子どもの貧困対策」のプラットフォームであり、縦割りは越えたものではあるものの、ステークホルダープラットフォームの中に含まれる課題ごとのステークホルダー会議に近いイメージなのかなと思う。ここで取り上げているのは、SDGs 全体を包含するプラットフォーム、いろいろな課題を取り上げている SDGs のプラットフォームということで、関西の事例を取り上げている。先行例にならって進めるべきということではなく、関西でこのようにやっているのなら、沖縄ではこうしてみようか、といった参考になればと思い記述した。

(島袋委員長)

了解した。子どもの貧困対策だと個別テーマとなり、読み手にイメージをしてもらうにはよいかと思ったが、佐野委員が指摘している点も理解できる。他の委員からも意見はないか。

(委員から意見挙がらず)

(島袋委員長)

Chatwork でも意見を交わしており、ほとんど対立点がなくなっている。では、プラットフォームに関する部分に絞られず、議論しておいたほうがいい意見はあるか。

(蟹江副委員長)

今まで議論をしてきてはいないが、条例だとか、SDGs を推進していくための法的な基盤を作ったほうがいいのではないかと考えていて、皆さんの合意が得られれば加えたい。国でも SDGs を推進するための基本法のようなものを作っていこうという動きがあるのだが、動きが遅いので、沖縄が先んじて取り組むという意味もある。また、仮に県の首脳部が変わったとしても継続して SDGs に取り組んでいくためにも、法的根拠なり理念なりがあったほうがよい。

(平本委員)

基本法を土台に、個別課題に関する条例などを策定していくことは、今後、県内の取り組みを推進するための後押しとして非常に有効だと認識している。報告書内では、その役割を担うだろう議会のところで、例えば「SDGs 推進基本法や個別の課題に関する条例のルール等に関して検討を進めていくことが期待される」などと加えるといいのかなと思う。また、各議員が選挙の際に、どういった社会を目指すのか方針を示すが、その際に沖縄が目指す SDGs の方向性を意識した方針を提示いただくことが現実的には必要だと思っている。基本法等については、どこまで文章として書き入れるのかは難しいが、少なくとも実際に国でも行われている議論の要点については明記してもいいのではないかと考える。

(島袋委員長)

了解した。議会に関する記述において「社会課題の解決に向けた政策に関する議論」「SDGs 推進基本条例」といった文言を入れるということだと理解した。

(佐野委員)

実施指針案は、県が作成する文書という想定で書かれているので、特に議会の部分については、Chatwork において委員長から指摘があったとおり、行政の立ち位置からの、議会という立法機関の書き方が難しく、「議論を行っていくことが期待される」という文言になっている。ここに追加する場合、例示的に条例の制定などを挿入する程度でないと、この文書に対する支持や受け入れにも影響すると思う。あるいは、県主体で条例制定なども提案していくという考え方もできるかもしれない。例えば性の多様性について県が関連条例を作っていきたいという考えをもって有識者委員会を設置した事例もある。そのような意味では、SDGs についての条例制定の立法を行うのは議会だが、条例の提案主体として県がアイデアを考えるということで、県の体制の部分に追記するのもいいのかもしれない。

(島袋委員長)

SDGs を推進するためには、SDGs 推進条例のみならず、様々な条例が必要となるため、そういった提案を積極的に行うことを県の体制の部分に追記し、また、議会については注意が必要な部分であるため、例示として条例の制定くらいに抑えるということでもよい。

(佐喜真委員)

今の条例に関する部分については、今後、実効性を担保していくためにも是非必要なことだと理解しており、是非本文に追加いただきたい。

(平本委員)

34 ページの(4)に関連するがステークホルダー会議で挙げた懸念点として、我々の提案をわかりやすく表現してほしいというリクエストがあった。よって、今回の提案に関する広報活動を行うことを追記いただきたいのだが、どうか。

(佐野委員)

実は、実施指針案の完成後、わかりやすい、子どもにもわかるような実施指針案の概要版を作ってほしいと県に提案したいと思っていた。県のホームページには子ども向けのサイトがあり、県もわかりやすい発信を意識していると思う。SDGs についても、子ども向けの概要版のような広報ツールを作って広く広報していく旨を書き足し、それを促していくことにしたい。離島のことも考え、媒体としてはデジタルと紙の両方があってよいと思う。

(島袋委員長)

了解した。気になっている点は、プラットフォームとなるホームページかサイトをできるだけ早く作るということである。将来的にはそこに情報が集まったり発信したりできる場として機能を持たせるのは広報の大事な部分だと思う。

(佐野委員)

27 ページの県の体制に関し、「特に SDGs に関する広報、情報発信やステークホルダーのネットワーク化は今後の取り組みを促進する基盤となるため、早急に対応する」と書いた。県の企画調整課は今からでも、SNS の発信や、ステークホルダー会議でも要望があったメーリングリストの作成など、情報交換の場づくりを進められると思うので、それを書いている。実際、既におきなわ SDGs パートナー団体宛てにアンケートが送られてきており、動きだしている部分もある。

(島袋委員長)

了解した。ではこの部分に関して、広報の部分を書き加えていただくということでよいか。SDGs に関する万国津梁会議は実質的には一年半程度であったが、今後、沖縄の SDGs 推進がうまくいくという希望が持てるような議論ができた。皆様に感謝申し上げたい。